

俺はあんな坊主は大嫌いだ、と、もう見ただけですぐそういう風にいう。こういう考え方の所において、しからば我々はどうすべきか、どういう姿でいくべきか、というところ

に一つの問題がある。東北六県教化研究会議の第二日目に、農村青年たちを六人位呼んでいろいろ話し合ったが、

彼らは、坊さんというのはこんなことまで考えているのか話し合っているのか、という驚きの目をもって我々を見ていた。坊さんというのは、お葬式をやってお布施をもらえばそれで終るもんだ、という風に考えていたという。ところが、自分たちの悩みの問題まで、どうしたら解決できるのかということまで考えていたのか、と驚いていた。それだけ坊さんというものは、一つの型にはまったものとして見られていたのである。今後、坊さんというのは、どういう姿であるべきかということ、まず自分たちなりに、はっきり把握することが大事である。

第五に、文書伝道の協同化の問題である。文書伝道は個人でやっているには限界がある。一つには費用の問題がある。それから、実際に原稿を集めたり、文章を書いて印刷物にするということがなかなか大変である。そこで今後の問題点としては、先ほどの都市伝道の問題の報告にもあったが、住職個人個人ではもうどうにもならない段階に来ているということである。みんなが手をつながなければ対処していけないというのが現状だと思ふ。

東北農村における信仰意識調査

望月一靖

この夏、秋田の方に参りまして、東北農村の宗教の意識調査をいたしました。細いデータは、また後にお渡しすることにして、ここではお詳しいお話をすることはできませんので、問題点となるところを、かいつまんでお話しします。

先ず、お話ししなければならないことは、一体何故われわれが農村の意識調査をしなければならないかという理由からお話したいと思ひます。

この教化研究会議で毎回取り上げられております日蓮宗の教化布教の在り方という問題が根本的に考え直さなければならぬ時期に来ているのではなからうかということです。その根本的に考え直すとは何かというと、一つは、われわれの教化の在り方が、今の社会、現代の人の心にどのように訴えているであらうか。昔からの伝統的な教化方法にのりながら活動しているわけですが、いったい現代人は何を求め、何を考えているのだらうか、というところを宗門人としてどう受けとめどう対処してゆくかという考え方がまだなかった。それぞれ教化されている方

々が個人的に受け取めて教化活動しているというのが現状であります。世の中が、複雑に変化している状況において、今迄のような教化活動でよいのかという問題が提起され、曲り角に來ている、われわれの反省の時期ではないか、そのような観点から日本人の宗教意識、古くから伝えられてきた日本的な宗教意識を、公害ではありませんが都会の影響を受けてない農村へ行ったならば、改めて考えることができるのではないだろうかと考えたわけであります。

ここに居られる秋田の木名瀬師、平元師その他の方々が主になって東北六県の教化研が持たれ、その中で教化対象である大衆がどのような考え方でいるのかよくわからないという問題が出され、もう一度基礎的な問題をとりあげてそして、自分たちの教化のあり方を究明しようという話が出され、それにもとづいて、秋田地方の宗教意識調査を行ったわけであります。

どんな問題をあげて調査したかと申しますと、一つは農村の人たちが日常生活の中で宗教行動をどのような形でやっているか、第二は、宗教行動に対してどのような意識・とらえ方をしているのか、第三の問題は、宗教者、ここでは寺院・僧侶に対してどのような考え、態度評価をもってあるか、大きく分けるとこの三つの点を中心に調査を進めました。

調査方法は、あらかじめ質問を用意し、比較的農村地域

を選び、調査員が個々にその家を訪問して、宗旨に関係なく質問面接調査を行い第一次調査で百十五名の方々に会いました。第二次調査では二十才前後の女性が各地から集っている学校で、さきにあげましたような問題を調査いたしました。調査した地域は、曹洞宗が大部分でありまして、お宅の宗旨はと聞いて確かに仏教であるが、さて何宗であるか不明の答えが14%あったという意外な数字であったと共に、あなたの信仰はという問いに対しては、はてと考えることでしるケースが多かったようです。宗教的には無關心ということが強く感ぜられたわけです。また反面、日蓮正宗、創価学会に入信している者は、はっきりとした答えがえつつくる、この点は、われわれも考えてゆかなければならない問題であると思います。

次に、宗教意識の行動という点で、お宅に仏壇がありますか、仏壇を拝みますかという質問を出しました。仏壇があるかどうかかわからないというのが10%、若い人ばかりでなくある程度の年齢に達した人の中にもこのような答えがあるということ、やはり問題のあるところですが、大体80乃至90%は仏壇があると答え、その中で毎日仏壇に手を合わせますかという礼拝については、三十代から四十代の人には36%、五十代から六十代は71%、二十代になりますとほとんど、お盆のような特別の時、ときどきという答えが多くなってくる、十代の拝むという答えが二十代より多い

という現象は、これはいったいどういうことなのか、やはり、教育の問題、その他の原因が考えられる興味のあるところであります。

また、拝む理由については、拝む人自身がはっきりしてない。一番多い理由をあげたのは、先祖への挨拶、次に何となく習慣だから、次に先祖への感謝・供養、中には拝まないとはよくないことが起るから、などという理由もあります。以上が仏壇の礼拝ですが、神棚ですと、習慣だからという理由が一番多い、このように、先祖への挨拶、習慣だからという拝む理由から、信仰のあり方、宗教行動ということがある意識されてない、というよりむしろ日本的な意識行動の中に、日蓮宗などのような挨拶の意義があるのか、浄土宗ならどのような挨拶の意味があるのかといった意識がはっきりしないといったところが、われわれ教化をしてゆく側として一つの問題があるのではないか、これは農村に限らず一般的な事柄かもしれません。

それから、第三の寺、僧侶に対してどのような考えをもっているのかという問は、非常に難しく、こちらで必要か否かのどちらかを選んでもらう方式を採りました。

寺が必要と答えたものは、十代で42%、二十代で85%でほとんど寺の存在を肯定しているが、その内容は、供養の為に33%、葬式の為に19%、そして心のよりどころというものが僅か9%、多くは供養・葬式の為に必要という要求

がうかがわれるわけでございます。

僧侶の方も必要と答えたものは、十代で51%、二十代で80%以上となっておりますが、どう必要かという答えになりますと、葬式をするなど儀式を行う場合に必要とするのが大部分の答えで失望させられたのであります。困ったときに相談する人、指導してもらえ人という意識がないということ、農村の中で坊さんというのがどのように受けとめられているかというのが疑問になったところであります。

今回の調査で感じたことは、農村の青年も意外にマスコミで一般化されてき、都市の青年と大へんに似たような傾向があるということがわかりました。

時間の都合で十分な説明ができませんでしたが、後の質問の時間で不足の点を埋めたいと思います。

現代と信仰実践

渡辺 宝陽

浅学非才な私に大へん重要な問題を問題提起しろということでございますが、私なりに考えたものを発表させていただきます。只今、新聞智照師・木名瀬寛明師の非常に具体的な問題を示されて、その中でいろいろの問題が考えられる